



TOSHUSAI SHARAKU ‘Ukiyoe artist’

โทซุไซ ชะราคุ จิตรกรวาดภาพอุกิโยะ

Takuji Wakabayashi¹

Abstract

The objective of this article is to find out who exactly was SHARAKU. Nowadays, SHARAKU was a well-known Ukiyoe artist, as famous as HOKUSAI, and HIROSHIGE. However, his real identity was very controversial for a long time, though almost 100 books about SHARAKU’s life were published after World War II. As a result, the real identity has become more obscure.

Many accounts about SHARAKU’s life had been told and recorded since Edo period from his contemporary. Anyway, for people like us who live 200 years later, this seems to be doubtful. Therefore, many researches have been done to confirm its reliability. From studying those researches, the researcher makes sure to find that SHARAKU was SAITO JUROBE, a Noh actor from Awa clan.

Keywords: Ukiyoe artist; Edo period; a Noh actor; Awa clan

¹ Lecturer, Japaness Section, Dpt. of Thai and Oriental Languages, Faculty of Humanities Ramkhamhaeng University



บทคัดย่อ

บทความชิ้นนี้เขียนขึ้นโดยมีวัตถุประสงค์เพื่อจะค้นหาว่า พระราคุ ที่แท้จริงแล้วเป็นใคร พระราคุ เป็นจิตรกรวาดภาพอุคิโยะที่มีชื่อเสียงมากที่สุดในปัจจุบันเทียบกับ โฮคุไซ และอิโรฮิเมะ แต่ตัวคนที่แท้จริงนั้นไม่เป็นที่ชัดเจนมาเป็นระยะเวลานาน เพื่อค้นหาความจริงที่ว่าพระราคุเป็นใคร มีหนังสือที่เกี่ยวกับพระราคุตีพิมพ์ออกมาจำนวนมาก โดยเฉพาะหลังสงครามโลกครั้งที่ 2 ซึ่งมีตีพิมพ์ออกมามากถึงเกือบ 100 เล่ม แต่ตัวตนของพระราคุกลับยังซับซ้อนมากขึ้น

เรื่องที่ว่าพระราคุเป็นใครนั้นมีการเถาขานกันมาตั้งแต่สมัยเอโดะ สำหรับคนที่อาศัยอยู่ในสมัยที่พระราคุมีชีวิตอยู่ก็อาจจะพอเข้าใจเกี่ยวกับเรื่องของพระราคุได้ แต่สำหรับพวกเราซึ่งอยู่ในช่วงเวลาที่ห่างกันถึง 200 ปี ไม่อาจเชื่อถือคำพูดของผู้คนในสมัยนั้นได้ง่าย ๆ จำเป็นต้องมีหลักฐานและเอกสารที่พอสมควรในการอ้างอิง แต่จากงานวิจัยที่มีมาทำให้ระดับความเชื่อถือที่มีต่อคำพูดเหล่านั้นมีมากขึ้น

บทความนี้เขียนขึ้นโดยใช้ฐานข้อมูลจากงานวิจัยที่มีการค้นคว้ามาก่อนเพื่อที่จะยืนยันว่า พระราคุคือ ไซโต จูโรเบ่ นักแสดงละครโนห์ แห่งแคว้นอวาระ

คำสำคัญ: จิตรกรวาดภาพอุคิโยะ สมัยเอโดะ นักแสดงละครโนห์ แคว้นอวาระ



1 写楽の浮世絵

写楽の活動期は寛政六年（1794）五月に売り出された大首絵二十八図を皮切りとして、翌年一月までとされている。この期間に役者絵を中心として百四十四の浮世絵が発表されている。活動期は四期に分けられる（1）。まず、その四期の特徴を見ていこう。

第一期

現在、写楽の代表作といえばこの時期のものになる。寛政六年五月の都座、河原崎座、桐座の三つの居小屋に取材した役者で、黒雲母摺の大首絵二十八枚である。役者の内面を捉えたかのような大胆なデフォルメが時代の絵師とは隔絶したものになっている。



市川鰯蔵の竹村定之進



初代市川男女蔵の奴一平



94

วารสารรามคำแหง ฉบับมนุษยศาสตร์ ปีที่ 32 ฉบับที่ 1

第二期 寛政六年七月の都座、八月の
河原崎座、桐座の興行に取材

した役者絵三十八枚。すべて
全身図である。



三代目沢村宗十郎の
名護屋山三元春



中島勘蔵の馬土ねぼけの長蔵

第三期 寛政六年十一月の三座と閏
十一月の都座の興行からの役
者絵五十八枚。内十一枚は大

首絵、全身図には舞台の雰囲気
も同時に描かれている。



大首絵の一枚
三代目沢村宗十郎の孔雀三郎なり平



初代中山富三郎の
忍ぶの里の牛飼おふで



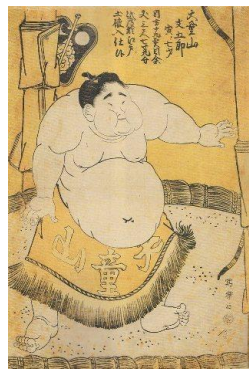
三代目坂東彦三郎の
五代三郎近忠



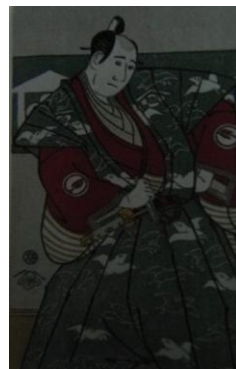
二代目中村野塩の紀の
貫之娘この花

第四期 寛政七年一月の都座 桐座の
初春興行を描いた全身図の役

者絵十枚。それに相撲図や
追善図など十枚。



大童山の土俵入り



三代目沢村宗十郎の
曽我の十郎祐成



2 写楽の芸術性

写楽に関する書物「写楽」は 1910 年、ドイツ人のユリウス・クルトによって出版された。その中でクルトは写楽をレンブラントやベラスケスと並んで、世界の三大肖像画家として賞賛した。写楽を芸術家として高く評価したのである。北斎や広重の風景画を取り上げたのがヨーロッパの印象派だったように、写楽にしてもその芸術的価値を認めたのは日本人ではなかったのだ。むろん、出版当時から写楽や北斎や広重の絵を求めた人は多くいただろう。しかしそれは愛好されたのであって、そこに芸術作品を見た人は多くなかった。特に、写楽の役者絵は当時の人にとってどう映ったか、それは、太田南畝の書である「浮世絵考証」に次のように記述されている。「これまた歌舞伎役者の似顔絵をうつせしが、あまり真を画かんとしてとてあらぬさまにかきなせしかば、長く世に行はれず、一兩年にして止ム」と。ここには現在の批評眼とは異なるものが述べられ

ている。ちなみに写楽の代表作の一つ

「三代目大谷鬼次の江戸兵衛」を取り上げてみよう。これは江戸兵衛が公金を奪おうとする場面で、鋭い目と一文字に噛みしめた口元、相手を威嚇しようとして広げられた手からは強い緊張感が漂ってくる。これを同じ人物を描

いた初代歌川豊国の絵(2)と比較してみると、写楽の独自性が感じられる。豊国は写楽と同時代の人で、役者絵の興隆をもたらした。その後、役者絵界をリードしていった人であるので、決して非凡の人ではない。また、大首絵と全身図の違いはあるが、それでも写楽のその場の一瞬を捉える構成力は際立っている。ただ、写楽の時代にはこの在りようが、必ずしも人々の評価を得たことにはならなかったようなのだ。もうひとつ、「三代目瀬川菊之丞の田辺文蔵妻おしづ」を見てみよう(3)。菊之丞は当時の名女形で美貌の持ち主

といわれていたらしい。しかし、この絵ではそんなところは微塵もない。逆境にあえぐ技が要求されたこともあるが、これを同じく豊国の描いた大星由良之助の妻お石を演じた菊之丞と比べてみよう。この絵はおしづの絵の2年後に描かれたものだが、女として捉えた場合、この違いは歴然としている。浮世絵は贈答に使われたり、ブロマイ

ドとして所蔵されたものである。写楽の女形の絵を見て、これをこぞって求めようとする人々がどれだけいたろうか。しかし、美貌の衰えかけた女形の逆境の苦しい生活の演技を写楽が瞬時に捉えていると考えてみれば、写楽の凄みを感じることができるのである。



写楽の三代目大谷
鬼次の江戸兵衛



豊国の三代目大谷
鬼次の江戸兵衛



写楽の三代目瀬川
菊之丞



豊国の三代目瀬川
菊之丞

3 写楽は誰か

200 年ほど前の、その当時の著名な文化人が、A という人の本名は B というのだと本に残していたとしよう。200年後のあなたが A ついて調べている時、その本を手にし、B という名を知った。しかし、B に関して資料はほとんどない。それでも、その調査はこの著名文化人の証言を基にして行われるのじゃないだろうか。この著名文化人がうそつきならともかく、わざわざ

嘘をついておく必要がないのであれば、その言葉は貴重な価値を持つものではないのだろうか。しかし、写楽に関しては、この地道な研究を続けた人々の声は聞く耳を持たぬ人々によって、正当に評価されてこなかった。マスコミが介入し、写楽の謎を大々的に取り上げ、世間を騒がせたことも要因ではあるだろう。京都大学と東京大学の学者の意見の対立が、マスコミの介入



によってまたたく様々な人々を巻き込んで、邪馬台国論争を生み出した風潮に似ているところがある。ただこの場合、原点となるのは「魏志倭人伝」で、これを無視して、邪馬台国論を語ることはできないが、この書物の中に誤記を提言して、様々な論に仕立て上げられていった。最近は今まで無口であった考古学の発展によって、専門家からの意見が重きを成すようになり、喧々諤々の空論は下火になった観がある。写楽に関してもそうなるのは必然の道だと思えるが、いまだに思いつきのような論がとび出す状況は収まってはいない。

写楽が在世中、あるいは写楽という人物について何かを知っている人がまだ生存していた時代、さらに古い時代の生活習慣や仕来たりがまだ社会の底辺に息づいていた時代には写楽が誰であるかは言わずもがなのことであった。しかし、戦後になり社会体制が変化し、抑えられていた意識の発露にともなって、写楽の芸術性を云々する人々が増え、その評価がオークションなどの競り額に現れるようになると、江戸期から暗黙の了解の中にあつた斉藤十郎兵衛説はいかにも貧弱で、実在

性の希薄なものになり、もっと確実な存在が求められるようになる。中野三敏氏(2007)に寄れば(4)戦後出版された写楽の書籍は昭和64年までだけでも主なものは36にのぼるという。むろん、論文の類を加えればその数はもっと増加するはずである。この書籍群の中では写楽の在世当時、絵筆を持つ可能性のあるものなら誰でも写楽に比定されている。たとえば、同じ浮世絵師の葛飾北斎、喜田川歌麿、鳥居清政、歌川豊国など。戯作者の十返舎一九や山東京伝、出版業の蔦屋重三郎もある。これ以外にも写楽は朝鮮人だという意見がとび出したりして、もう遊びの世界へ踏み出した感があるが、やはり書籍として公の目にさらされる以上、自己満足の過剰推理は慎まなければならないだろう。

写楽は200年ほど前の人であり、現在の我々は誰一人としてその姿を見、その声を聞いたことがないのであれば、写楽が自筆で私の本名はこれこれだと言った証拠が残っていないかぎり、本当のことを突き止めることは難しい。それには、とってつけた推論ではなくて、外堀を埋め、内堀を埋めていく地道な研究以外に他に方法はない

だろう。この小論では、最近かなり決定的になってきた写楽の正体を見極める研究の成果を見ていこうと思う。

4 東州斎写楽・斉藤十郎兵衛

写楽が誰であるか、その研究の第一歩はやはり斉藤月岑の「増補・浮世絵類考」からだろう。この書物には写楽に関して、簡潔に以下のように書かれている。

天明寛政年中の人 俗称斉藤十郎兵衛、江戸八丁堀に住す、阿波侯の能役者也 —— 回りに雲母を摺たるもの多し

中野三敏氏によれば、この僅かな写楽に関する記述は千人になんなん



とする浮世絵師のなかでも、「葛飾北斎伝」(5)のある葛飾北斎や鳥文斎栄之、菱川師宣、喜多川歌麿、歌川広重などを除けば、十分な情報を満たしているという。この書物は寛政十年(1798)頃の太田南畝の「浮世絵考証」という書物から始まっている。これは写楽を含めた浮世絵師31人についての解説を書きとめたもので、以来、写本に次々加筆する人があって、その内容が増えていったものである。そして、この積み重ねが天保十五年(1844)に成った「増補・浮世絵類考」に繋がっていくのである。この書き

込みの中には式亭三馬の「三馬按、写楽号東周斎、江戸八丁堀に住す、半年余行ハル、ノミ」文政四年(1821)というもののや、達磨屋五一所蔵の写本には「写楽は阿州侯の士にて、俗称を斉藤十郎兵衛といふよし、栄松斎長喜老人の話なり、周一作洲(周ハ一ニ洲ニ作ル)」とある。最後のカッコの中の文字は三馬の東周斎の周の字の誤りを洲に改めたものだと考えられる。写本に書き込まれた内容を検討していけば、写楽に関して次のような情報が得られたことになる。

- 1 俗称は斎藤十郎兵衛といったこと
- 2 江戸八丁堀に住んでいたこと
- 3 阿波侯の能役者だったこと
- 4 活動期間が半年、あるいは一兩年だったこと

斎藤十郎兵衛の実在性の追及は昭和初期、鳥居龍蔵によって行われた。そして、鳥居は阿波藩に喜多流ワキ師斎藤十郎兵衛が実在したことを確認した。ただその実在年代は文政(1825)以降のもので、寛政期の実在については後藤捷一氏が寛政四年に成った「御両国(淡路・阿波)無足以下分限帳」に「御役者、五人扶持判金式枚、斎藤十郎兵衛」という記事を見つけた。これで、寛政期に阿波藩に斎藤十郎兵衛の実在が証明されたのだが、徳島県下の墓碑銘や過去帳からはこの人物の実在が証明されなかったもので、写楽との関係が証明されたことにはならなかった。阿波藩の斎藤十郎兵衛が江戸八丁堀に住んでいた人物であることを証明しなければならないのである。

また、後藤捷一氏は「無足分限帳」に「江戸住斎藤十郎兵衛」という記事も見つけており、江戸住は江戸屋敷に詰めているのではなく、江戸で生涯生活をしているという意味であり、徳島に痕跡がないのはこのためだと考えられるようになった。

1977 年、中野三敏氏は「此書歌舞伎役者瀬川富三郎所有也」「文政元年七月五日竹本氏写来七十翁蜀山人」と南畝の書き入れの入った「諸家人名江戸方角分」に「号写楽斎 地藏橋」の記述を認めた。氏の考証(「写楽」中央公論社刊)によれば、この書物は文化十二年(1815)から同十五年(文政元年でもある)にかけて、三代目瀬川富三郎によって書かれた、一種人名録のようなものだという。京都や大坂では儒者や医者、画家など有名人を集めた人名録は早くから出版されており、この人名録もその後を次いだものだが、そこに取り上げられている人名



数は千七十七名におよび、その職業も俳諧師、戯作者、浮世絵師など、今まで取り上げられなかった職業を含んでいる。

それではどのように記載されているかという、歌麿を例にすると、傳馬町の部の上に歌麿と通号があり、右横に黒丸の合印がある。この合印は画家を表すもので、当時、歌麿は浮世絵師としてよりも画家として認められていたことになる。そして、下に実名があり、北川市太郎となっている。その右には小文字で当時の住所が書いてある。歌麿は文化三年に亡くなっており、この人名録は文化十二年ごろからのものなので、号命の横に鍵方の死亡を現す印がついている。では、写楽はどうなっているかといえば、八丁堀の部にあるが、通号のところと実名のところが空白になっている。通号の下には小文字で号写楽斎、下の空白の右には小文字で地蔵橋となっている。また、上部の空白の右には浮世絵師を表す×の印があり、死亡を表す印もついている。ここで問題になるのは、（ア）どうして空白部があるのか。（イ）文化十四年には写楽は死亡していたの

か。それと、（ウ）通号がどうして東洲斎でなく、写楽斎なのかということになるが、それは次のように説明されている。（ア）についていえば、写楽は下級であっても武士である。武士の身分で公に自分は浮世絵を書いていると世間沙汰になるのは具合が悪い。三代目瀬川富三郎は初代富三郎である三代目菊之丞の門下である。写楽にはこの初代と二代目富三郎の作品が多い。こういうことから、三代目は写楽と好意であり、人名録を作るとき、相手の心情を慮り、空欄を設けたとされている。むろん、写楽についてよく知らなかったからその部分が空白になったという考えもあるが、なんらかの事情があったのだらうと思われる。（イ）については、1997年に徳島の「写楽の会」のメンバーが埼玉県越谷市の法光寺の過去帳に斎藤十郎兵衛の名を見出した。この寺はもともと築地にあったとされている。その過去帳には「辰三月七日 釋大乘院覺雲居士 八町堀地藏橋 阿州殿御内 斎藤十良兵衛吉又 行年五十八 千住ニテ火葬(6)」とあり、没年は文政三年(1820)三月七日、享年五十八と記されていた。「諸家

人名江戸方角分」は中野氏の考察によれば早くて文化十二年(1815)遅くて文政元年(1818)になったとされている。この人名録では写楽の項に死亡を表す印が書き込まれている。これでは、人名録の写楽と過去帳の写楽は別人になってしまう。しかし、克明に調べてみると、死亡印には多く見て四つの違う形があるという。また、文政二年、三年に他界したものにも印のあるも

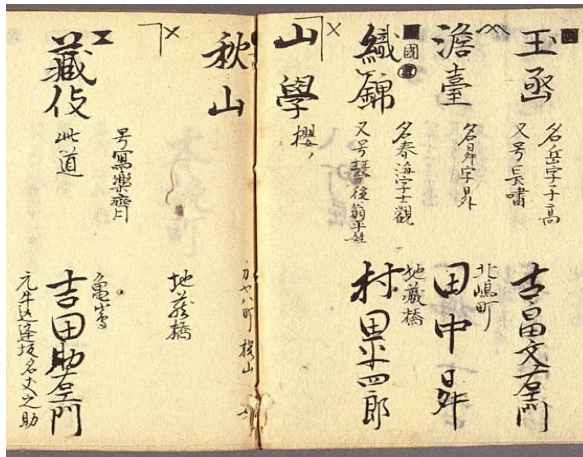
のがあり、後からの書き加えが考えられる。写楽の場合も書き加えがなされたものだろう。(ウ)に関しては、写楽の項のように通称か通号、それと実名の二つともを記さないのは他に二名いるという。中野氏はこの点に関して明快な説明をされていないが、写楽と書き込むところを空欄にしたゆえ、下記に小



文字で号写楽斎と書き込むことで、空欄のところに何が入るのか容易にしたのじゃなかろうか。当時の人はこれで十分わかったのである。

ここまでで、「増補・浮世絵類

考」の「江戸八丁堀に住む」の記述は「諸家人名江戸方角分」によって補完されることになり、さらに法光寺の過去帳はそれを一層明白にしたことになる。



「諸家人名江戸方角分」の写楽
の欄。通名と本名（俗名）の
ところが空欄になっている。

一方、永井俊哉氏(2011)の「写楽の謎を解く」(7)によれば、河野太郎氏は文化十三年(1816)の「徳川礼典付録」の能「針の木」の明細書に、斎藤十郎兵衛の名前を見つけている。この演目では斎藤十郎兵衛はワキツレを演じている。また、森敬介氏によれば蜂須賀藩邸で催された能、「巴」と「大蛇」で斎藤十郎兵衛はワキ、ワキツレで演じているという。明細書の年代が不明なのが惜しまれるが、斎藤十郎兵衛が演じるのはワキかワキツレであることが明白になった。

また、内田千鶴子氏(1998)の「写楽・考」(8)によれば、「猿楽分限帳」、「重修猿楽伝記」には斎藤家は喜多流に属し、与右衛門と十郎兵衛を交互に名乗る家柄であると記述されている。さらに、この二つの書物からは斎藤十郎兵衛（写楽）は宝暦十一年(1761)年の生まれで、最初の大首絵が売り出された寛政六年には三十三歳であったこともわかっている。これと過去帳の記載を合わせると写楽の生涯の時間はほぼ矛盾なく証明されたことになる。

これは直接の証拠とは行かないが、嘉永七年(1854)に出版された「本

八丁堀辺之絵図」には地蔵橋辺りに誰が住んでいたのか克明に書かれてい



る。そしてそこに斎藤与右衛門という名を見出す。写楽が死んで30年以上たつが、斎藤家は能役者としての生計を続けていたわけである。

次に活動期間のことである。太田南畝は「長く世に行われず、一兩年にして止ム」と言っているし、式亭三馬は「半年余行ハレ、ノミ」としている。実際の期間は寛政六年の五月から、翌寛政七年の一月までである。閏月を含めて十ヶ月ほどとされている。南畝の一兩年は新しい年に及ぶと解釈されるし、三馬は半年余といっている。この期間に関しては十分信憑性がある。ただ、二人とも否定的なニュアンスがあるので、写楽の浮世絵はあまり世間の評判を得なかったのかもしれない。特に、南畝は「あまり真を画かんとしてあらぬさまに」描いたことが原因だと言っている。

写楽の浮世絵の版元は蔦屋重三郎(1750~1797)である。蔦屋は山東

京伝と組んで、「江戸生艶気樺焼」などの黄表紙の出版が有名だが、流行しつつあった浮世絵に関心を持ち、その出版にも参入する。

蔦屋は寛政の改革による締め付けの煽りで、財産半減の処罰を受けたが、その後、歌麿の美人画のヒットによって、経営を立て直した。しかし、歌麿との軋轢が生じ、新しい浮世絵師を探す必要があった。おりしも、役者絵が人気になりつつあり、歌川豊国に対抗する絵師として写楽に白羽の矢を立てたのだろう。そうすると、当時、写楽の役者絵は業界では知られていたのだろう。蔦屋は多くの資金を投入して、豪華な黒雲母摺の大首絵を出版する。おそらく、南畝の言葉はこの大首絵に対してなされた批評なのだろう。この批評が当時の大方の評価なら、写楽の浮世絵は世間に受け入れられなかったことになる。一般的に言われるよ

うに、その後の四期までの絵の質の低下はこういった理由によるものだろう。質が低下すれば、さらに購入する人が減る。ブロマイドのようなものでしかない役者絵は売れなければ、おしまいなのだ。

短期間で写楽の浮世絵が消えたのは不人気だとする説が大勢を占めているが、内田千鶴子氏によって、もうひとつ、その説明が補完されるようになった。それは当時の阿波藩の能役者は五月から、次ぎの年の四月まで仕事につくと、その年の五月から、翌年の四月まで休むことができたということだ。これは写楽の活動期間とぴたり合

う。寛政六年の初春興行でなく、どうして写楽の役者絵が五月の夏興行から現れたのかの説明も容易にできそうである。ただ、十ヶ月ほどで、それ以後、浮世絵を描けなかったのは、やはり世間の評判が思ったほどでなく、蔦屋にしても出版を続けることが難しくなったのだろうと思える。式亭三馬の「稗史億説 年代記」に浮世絵師の画壇地図が描かれているが、その中で、写楽は一つの島のように描かれている。孤島である。派に属さない写楽は、それ以後、浮世絵を描く機会を与えられなかったのだろうか。

中野氏によれば、「浮世絵類考」の写本のひとつの中に、町医であり、随筆「我衣」の著者加藤曳尾庵は「しかしながら、筆力雅趣ありて賞すべし」という評価を書いているというし、出版が興行的には成らなかったとしても、評価する人々もいたにはちがいない。

以上述べてきたように、多くの人の地道な努力によって、ほぼ間違いなく、写楽の正体は明かされたように思う。斎藤月岑が「増補・浮世絵類考」で、斎藤十郎兵衛という江戸の八丁堀に住んでいた阿波の能役者は写楽だという記述は何重にも補完された証拠によって、揺るぎないものになったのである。



「稗史億説 年代記」より。
写楽は狐島として描がかれている。

5 写楽の謎

特に戦後、写楽は謎の浮世絵師といわれ続けた。それが多くの写楽論を生み出す要因となったのだが、写楽は結局、写楽からそう年代の離れていない、「江戸名所図会」や「声曲類纂」などの作者、当時の一級文化人斎藤月岑の記述に正当性が認められるようになった。しかし、それによって写楽の謎がすべて解消されたのかというと、そうではない。ここでは一つ、写楽は10ヶ月ほどで本当に活動を止めてし

まったのかということについて述べてみたい。

2011年に放映されたNHKスペシャル「浮世絵ミステリー写楽 天才絵師の正体を追う」(9)という番組がある。2008年、ギリシャの国立コルフ・アジア美術館の所蔵する浮世絵に対して日本人学者の行った学術調査からもたらされた結果を扱ったものである。この番組で取り上げられたのは写楽の署名がある、扇に描かれた肉筆画



である。そこには四代目松本幸四郎の加古川本蔵と松本米三郎の小浪が描かれていた。調査団の調査によれば、画中に後世の持ち主が書き加えたものや誤記なども見られるが、写楽の絵と考えて差支えないという結論が出た。

そして、この絵の場面は寛政七年(1795)五月に川原崎座で演じられた「仮名手本忠臣蔵」と一致することがわかった。浮世絵師が役者の下絵を描くのは稽古中がもっとも可能性が高い。すると、浮世絵と肉筆画の違いはあっても、この肉筆画はこの年の五月までの時期に描かれたことになり、第四期の浮世絵作品が絶筆だったとは言えなくなる。

浮世絵の下絵は彫り師が版木を削るので、浮世絵師それぞれの特徴を消してしまうことになるが、この肉筆画には他の浮世絵師とは違う線の特徴が見られ、それによって、写楽が北斎でも、豊国でも、歌麿でもなくなり、他の有名な浮世絵師の変名であるという説は完全に否定された。さらに、以前から写楽の絵だといわれていた三重

県津市にある石水博物館の同じ肉筆画「老人図」の筆遣いと同じ線の特徴が見られることがわかった。この絵には、初代豊国の寛政十二年(1800)二月に市村座で上演された「楼門五三桐」の

場面が描かれており、少なくとも写楽がこの時期まで絵を描き続けていたことが判明する。これ以外に世界には写楽のものだといわれる版下絵が残っており、これらの線のタッチなどの詳しい比較が、もっと新しい知見を増やすことになるだろう。

鳶屋が写楽に浮世絵を描かそうと考えたのはその絵を見て十分な手ごたえを感じたからだろうし、そういう絵は一朝一夕には描くことができないので、写楽は習作を含めてけっこうな分量の絵を描いていたはずである。それが後世に伝わっていないのは、やはり前述したよう

に、それらを 破棄せざるを得ないような理由が生じたと考えられる。そして、鳶屋から離れた後はいい仕事は回ってこなかっただろうと考えられるが、決して筆を捨てたのではなかった。

この番組(10)では東洲斎という通号について、おもしろい解説を紹介していた。これは写楽の活動期間とは関係のないものだが、ちょっと書い

ておきたい「とう・しゅう・ さい」を並びかえると「さい・とう・しゅう(じゅう)」。写楽は自分の通号にそっくり自分の名前を入れていたことになる。



肉筆扇面画「松本幸四郎の加古川本蔵と松本米三郎の小浪」

6 新しい写楽像

これからの写楽像は、写楽が阿波藩の能役者斎藤十郎兵衛であるという観点に立って追及されるべきで、写楽は斎藤十郎兵衛以外の他の誰それだ式の考察はもう唾棄されるべきである。

永井俊哉氏の「写楽の謎を解く」という論考を読んでいると、その中にワキかワキツレの能役者として写楽の問題を捉えている箇所がある。ワキにしても、ワキツレならなおさら、端っばの役を演じた写楽は二流、三流の歌舞伎役者に自分の境遇を重ねることがあり、それがそういった人たちへの親近感を生み、普段は余り描かれない下っ端役者の絵を描かせたという指摘である。この指摘は何もそんなに目新しいものではないが、さらにもっと興味があるのは夢幻能においてワキの存在は主役としてのシテ、この場合は幽

霊であるが、本来見えないはずのその存在を観客にわからせ、シテの物語を聞き分けるという役割を果たしているという。そして、写楽はワキ役者として、歌舞伎界のシテ役者を、あるいは歌舞伎界そのものを観客に示そうとしたのではなかろうかという推理である。それは浮世絵をいうものを通して行われたのだが、写楽が脇役に徹すれば徹するほど、その絵は形より内面に向かい、あの写楽独特の絵が生まれたのじゃなかろうかという考え方である。

一方、中野三敏氏は文化の中に「雅」と「俗」という言葉を持ち込む。雅の文化とは伝統文化であり、俗の文化は新興文化である。両者は互いに反発したり、融和したりすることがあるが、江戸時代においては雅は上位者、俗は下位者と文化的な身分制があった。そんななかで、俗の俗である



歌舞伎役者は庶民以下の序列に属した。ここから氏は武士階級に属する写楽が、役者絵を描き続けることの難しさを導き出し、活動期の短さを指摘したが、それは写楽の絵が活動期以外にあまり残っていないことにも繋がって行く指摘だと思う。

ここで取り上げた二つの考察は
これからの新しい写楽像への取り組み

のモデルになると思われる考察である。写楽のあり様として、ワキとしての能役者の意味を考察すること、写楽が存在した身分制社会の文化的状況を幅広く捉えるということ、こういうところを眼点にしてこそ写楽像は確かな姿を表し、豊かなものになるだろうと思える。



参考文献と資料

- (1) 浅野秀剛編著. (2011). 「別冊太陽 写楽」. 平凡社
- (2) 小林忠監修. (2006). 「別冊太陽 浮世絵師列伝」. 平凡社
- (3) 大久保純一著. (2008). 「浮世絵」. 岩波書店
- (4) 中野三敏著. (2007) 「写楽」. 中央公論社
- (5) 飯島虚心著. 鈴木重三校注. (1999). 「葛飾北斎伝」. 岩波書店
- (6) Ukiyoeshi : Sharaku. Retrieved December 9, 2012, from
<http://homepage3.nifty.com/shirakobato-network/famous/sharaku.html>
- (7) Nagai Toshiya. Sharaku no Naszo o Toku (2008). Retrieved December 9, 2012, from <http://www.systemicsarchive.com/ja/a/sharaku.html>
- (8) 内田千鶴子著. (1998). 「写楽・考」. 三一書房
- (9) Toshusai Sharaku. Retrieved December 9, 2012, from
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%B1%E6%B2%E6%96%8E%E5%86%99%E6%A5%BD>
- (10) N H K スペシャル「浮世絵ミステリー写楽 天才浮世絵師の正体を追う」.
(2011)

画像

- Nagai Toshiya. Sharaku no Nazo o Toku (2008). Retrieved December 9, 2012, from
<http://www.systemicsarchive.com/ja/a/sharaku.html>
- Sharaku to wa... (2011). Retrieved December 11, 2012, from
<http://www.k4.dion.ne.jp/~skipio/21essay2/Syaraku.htm>
- 5/1 no Odekake 57 Sharaku 55 (2011). Retrieved December 11, 2012, from

<http://ameblo.jp/giantlimited/entry-10893913402.html>



วารสารรวมคำแหง ฉบับมนุษยศาสตร์ ปีที่ 32 ฉบับที่ 1

5/1 no Odekake 159 Sharaku 157 (2011). Retrieved December 11, 2012, from

<http://ameblo.jp/giantlimited/entry-10906685456.html>

5/1 no Odekake 188 Sharaku 186 (2011). Retrieved December 11, 2012, from

<http://ameblo.jp/giantlimited/entry-10906873184.html>

Sharaku no Shotai (2011). Retrieved December 9, 2012, from

<http://blog.hix05.com/blog/2011/05/post-1892.html>

Toshusai Sharaku no Sakuhin. Retrieved December 15, 2012, from

http://island.geocities.jp/hisui_watanabe/art/artgallery/ukiyoe2/sharaku/sharaku.html

Sharaku : Yakushae Ichikawa Ebizo. Retrieved December 11, 2012, from

<http://www.asahi-net.or.jp/~la7m-ymnk/Ukiyoe/Sharaku/Html/f006.html>

Sharaku : Yakushae Ichikawa Omezo. Retrieved December 11, 2012, from

<http://www.asahi-net.or.jp/~la7m-ymnk/Ukiyoe/Syaraku/Html/f008.html>

Sharaku : Yakushae 3daime Ichikawa Sojuro. Retrieved December 11, 2012, from

<http://www.asahi-net.or.jp/~la7m-ymnk/Ukiyoe/Syaraku/Html/f010.html>